

作家ハーディとその短編

「ドイツ人部隊の憂うつな軽騎兵」について

秋 葉 敏 夫

イギリスの場合、小説の伝統は19世紀に形成されたといわれることがある。とくに30年代末からおよそ60年も続くヴィクトリア朝には、多くの才能豊かな小説家が輩出し、彼らはこぞってすぐれた作品を発表した。その特徴は、それらはほとんど長編小説だということで、結果的に長編小説が当時の文学世界の主流を占め、いきおいその傑作が時代を代表するかたちとなる。長編小説というのは、概して、社会や人生の諸問題が広範な透視図のもとで、詳細に展開される散文形式である。時代に即していえば、それらの傑作は、多かれ少なかれ、ヴィクトリア朝の社会問題、それも偽善や虚栄に歪められた社会の病める部分を取り扱っている。また、その社会で人びとが遭遇する悲惨な人生と、他方では、堅固な社会的規範の枠を踏み越え、自我の確立へ向かう、新しい人間の動きを描いている。芸術的構成を意識した小説、つまり精緻な小説技法の開拓は、そこにはまだ、ほとんど見られない。しかしながら、時代の問題意識が興味深く展開され、その奥に潜む人間模様の真実と読者への訴求力の強さの点で、ヴィクトリア朝の小説は他の時代のものに勝るとも劣らない重量感を持っている。当時の長編小説隆盛の担い手は、もちろん、資質と才能に恵まれた作家たちだが、同時に、ものごとがそれに「追い風」だったこと、例えば生活に余裕のある中産階級読者層の増大や、月刊分冊による販売の普及なども無視することはできない。

もっとも、ヴィクトリア朝の時代に、すぐれた短編小説があまり見当たらないというわけではない。長編小説の華々しい隆盛の陰に隠れて、

短編小説の存在は薄いだけだと理解してよいのである。なるほどイギリスでは、他の西欧諸国と比較し、短編小説の発達がやや遅かったのは事実である。その理由は明確ではないし、単純に解明できるものではないが、例えば元来ものごとをこつこつ忍耐強く追求しがちなイギリス人気質が、基本的な1つとして考えられるだろうか。また、短編小説の主題は抒情詩でも効果的に扱うことができ、とくに19世紀初頭の浪漫派を初めとする感性豊かな詩人たちの抒情詩には、いわばその要素を多分に含むとみなせるものが少なくない。ただ実際問題としては、短編小説に専念する著名な作家が、当時のイギリスには、皆無といわれないまでもごくわずかだったのである。その頃のすぐれた短編小説は、たとえ少女少女向けであれ、作者の「息抜き」とか「気晴らし」的であれ、長編小説の作家たちによるものが多い。例としてチャールズ・ディケンズ(1812~70)がその1人であり、この小論で扱うトマス・ハーディ(1840~1928)もそうである。とくにハーディは、8冊の詩集や3部にわたる長編の叙事詩劇と1冊の詩劇は別として、14編の長編小説を書いており、その上、玉石混交は避けられないが、ほぼ40編におよぶ短編小説を残している。

短編小説というのは、長編小説とは異なる、それ独自の性質あるいは特徴を持っている。つまり、物語の長さが短いということから、細部の選択が意識され、必然的にもものごとの集中とか凝縮が重要になってくる。扱われるのは全体的な、広範な出来事ではなく、そのうちの1つの局面であり、余計なものはごく簡潔に説明されるか、削ぎ落とされる。短編小説が時々「引き算の美学」といわれるのはそのためだが、その狙いは、もちろん、読み終えたあともしばらくの間は忘れることのできない、焦点の絞られた「単一の効果」である。そしてそのために、使われることばや表現は感情喚起力を生命とする詩のそれに近づき、暗示や象徴を含むことが多くなる。短編小説とはすこぶる意識的な技術の産物であり、たとえ散文で書かれるにせよ、その性質や特徴の面で、意外と詩に近い

のである。

ところが、ハーディの短編小説に関しては、事情がいささか異なるように思われる。概して長編小説作家が短編小説を書くとき、その短編は長編の問題点を側面から照射し、それを端的に浮き上がらせることが多い。あるいは作家の本質の1部が、プロットの錯綜した長編では隠れていても、簡潔な短編では純化され、素直に呈示されることがある。ハーディの場合、そういう傾向はやはり認められるが、彼の短編はいわゆる短編小説の特徴をあまり持たない。そこでは例外はあるにせよ、ものが人生全体の広範な視野のもとで眺められるし、そのためにその影響力の結果として、人生での結末が最後にはっきり物語られる。彼の短編小説はいわば「ミニ長編小説」の色彩が強いのである。例えばクリスティン・ブレイディの**ことば**を借りれば、「ハーディ自身、^{ストーリー}物語、^{テイル}話、^{ノベル}小説という用語を交互に使っており、文学ジャンルとしての長編小説と短編小説との間に、厳密な理論的区別はしなかったように思われる。彼にとっては、『話す価値のある』物語というのが良い虚構小説と判断する唯一の基準だったのだ¹¹⁾」ということになる。

ハーディが小説を書き始めたのは19世紀も60年代後半で、すでに述べたように、当時のイギリスでは長編小説の全盛時代である。短編小説はまだそれほど歓迎されない出版事情もあって、彼は短編執筆にはあまり情熱を注ぎ込めなかったらしい。彼が短編小説をかなり発表し始める80年代初めには、すでに長編小説14編の半数以上が出版されているのである。ハーディはその後、95年に長編の筆を折り、短編もおおよそ世紀の変わり目にはほとんど執筆を絶ってしまう。そして晩年の彼は詩の制作に心血を注ぎ、彼の詩集や詩劇は、その構想や個々の詩作は早いものもあるが、1つの詩集を除いてすべて今世紀に出版された。

この小論で扱う短編、「ドイツ人部隊の憂うつな軽騎兵」(‘The Melancholy Hussar of the German Legion’, 1889年10月完成)は、例によっ

て、最初は雑誌に発表され、続いて短編集『人生の小さな皮肉』(Life's Little Ironies, 1894)に9作品の1つとして収録される。その後、作家全集の決定版が1912年に出ると、この作品は短編集『ウェセックス物語』(Wessex Tales, 初版は1888年)に移された。その理由は主に物語の時代背景や舞台の統一によっている。つまり、「ドイツ人部隊の憂うつな軽騎兵」の時代背景が19世紀初頭にさかのぼり、舞台が古代イギリスのウェセックス地方の中心、現在のイングランド南西部のドーセット州に置かれているからにはほかならない。物語はイギリス中産階級の娘とドイツ人軽騎兵との平凡な悲恋で、それが均整のとれた構成と適切な状況説明のなかで、淡々と進められていく。ところが、およそ7,300語ほどの作品の随所に、作家ハーディの本質に触れるものや、短編にふさわしい見事な技巧が散りばめられる。とくに、クライマックス部の予想外の展開に加え、語り手の巧みな使用、ものごとへの象徴性の付与、視覚的、聴覚的描写の効果、時間の経過と静止の暗示などは注目に値するものだろう。

物語に語り手を使用すると、多くはその体験談という形式から、語られるものごとがまったくの作りものではなく、現実の出来事であるのをごく自然に感じさせる。また、注釈的説明が容易であって、批評や意見を差しはさんでも、「全知の作者」の場合のような、大上段からの押しつけがましさにならない。それに、「目の前にいるかのような」語り手の物語に対し、読者の興味は親しさを増してくるのが普通だろう。語り手使用の利点はまだほかにもあるかもしれないが、作家ハーディは、「ドイツ人部隊の憂うつな軽騎兵」のなかで、以上の利点を十分に活用する。物語の典拠は語り手の口から信じられるように説明されるし、その時代背景が作品発表時のおよそ90年ほど前なので、当時の状況、人びとの風俗や考え方の注釈も無理なく進められる。現に、この短編はかなり事実

公の女性を知る人物とも話しているという⁽²⁾。彼の仕事は、ここでは、事実に即した物語を虚構作品のなかで本物らしく語り継ぐことと、その物語に含まれる人生の意味を効果的に伝えることである。

とりあえず、物語を簡単に要約しておこう。それは語り手の「私」が15才の少年のとき、すでに75才の老婦人だった物語の主人公から、じかに聞いた話である。彼女の名前はフィリスといい、父親はもと開業医だが今はそれを廃業して、2人は田舎の人里離れた辺りな場所に住んでいる。彼女は村人と付き合いこともなく、恥ずかしがり屋で、見知らぬ人に出会うと、歩き方がぎこちなくなり、ひどく顔を赤らめる。やがて、そういう彼女にも、30男の求婚者が現われ、地方の名家の出身らしい、この堅実そうな田舎紳士、ハンフリイ・グールドと、彼女はいわば天にも昇るような気持ちで婚約する。ただし、彼は実際は金回りがよくなく、故郷に帰ったまま約束の時になっても戻らず、2人の結婚は延ばされる。フィリスの心に名状し難いもの悲しさが生まれてくる。彼女が近くに野営中のドイツ人部隊の若い軽騎兵、華やかな軍服に身を固めながらも、異国の土地で寂しさに苦しむマテウス・ティナと出会い、恋におちいるのは、まさに、そういう状況の時である。

フィリスは庭のはずれの石堀に座って、ドイツ人軽騎兵ティナとの逢引きを続ける。しばらくすると、彼からの突然の求婚。ティナは故国の母がなつかしく、フィリスは彼の故郷で、彼や彼の母親と一緒に幸せに暮らすことを頼まれる。彼の計画では、自分はボートで部隊を脱走するので、フィリスに付いて来てほしいというのである。彼女はひどく当惑し、ちゅうちょするのだが、婚約者グールドからの少ない便りは素っ気なく、婚約もまったく曖昧なものになっていたし、父親からは軽騎兵との逢引きを恐れて叔母の家へ送られそうになっていたのもので、結局はティナの計画に同意する。そして駆け落ち実行の夜、フィリスが約束の街道沿いでティナを待っていると、彼よりさきに、予想もしないグールドを

乗せた馬車が到着。動揺した彼女は、良心の苛責を感じて決心を変え、軽騎兵ティナとの駆け落ちを断念する。だが、ほかの場所で待つ協力者の友人のために、ティナはそのまま部隊脱走の計画を遂行した。

クライマックス部から結論部にかけては、読者はいわば驚きの連続になる。小説家ハーディの特徴は、1つは、変化に富んだ物語の予想外の展開と思われるが、それはこの短編でも充分窺えるところだろう。フィリスの婚約者グールドが立派な贈り物を持って戻って来たのは、しかしながら、婚約解消のためだったのである。それから数日後のある日、軽騎兵ティナと逢引きしていた庭のはずれの石塀に登っていると、フィリスは思いがけず、例の野営地で2人の兵士が銃殺刑に処せられるのを目撃する。処刑された2人は、彼女が駆け落ちしようとした相手とその友人だった。彼らはイギリス海峡の大きな島をフランスの海岸と間違え、そこで事の真相が発覚して、当局に引き渡されたのである。現在はフィリスも、この軽騎兵たちの荒れはてた塚のそばに眠っている。

つまり、ものごとは青春期のフィリスの結婚話が中心である。それも結果的には破談に終わった体験で、それをめぐって、人生の皮肉や、愛のはかなさ、弱さなどと、人間の本質的な孤独が暗示される。作家ハーディにとって、人生とはいわばそんなものであり、例えばフィリスはどうすればよかったのか、彼女の態度に問題はなかったのか、という議論は展開されない。フィリスの最初の婚約者の身勝手な行動は非難されねばならないし、そういう人間の存在を若いフィリスも理解しなければならぬが、焦点がそこに置かれるわけではない。彼女はただ何かに振り回され、不幸な結果になって、惨めな生活を耐え忍ぶという、自分に与えられた役割を淡々と演じ抜くのである。人間の不幸は、そこでは、個人の意志や自発的選択の結果ではない。その適否、あるいは巧拙によるのではない。それは1つの運命、それも皮肉な運命に近い。フィリスの場合、偶然とはいえ、最初の婚約者が数年ぶりに出現して、彼女は恋人との駆

け落ちを断念し、深い思いに沈む。語り手のことばを借りれば、「彼女(＝フィリス)の気持ちは、定められた道と考える所を女性に機械的に進ませる、あの惨めな気持ちだった⁽³⁾」と説明される。彼女はただ、ものごとの成り行きに、身をまかせざるを得ないのである。

そしてフィリスにとっての痛ましさは、彼女が人びととの接触も少なく、孤独な生活を余儀なくされたということだろう。接触した数少ない人びとと彼女との間に、心の触れ合いはほとんど生まれぬか、生まれてもほんの一時的なものにすぎなかった。人間の孤独も、普通は最も親しいはずの夫婦、親子、兄弟、恋人、友人などの間の別離を扱うとき、その皮肉な効果は抜群になる。フィリスは父親の引退にともない、青春期にして、人里離れた寂しい土地での生活に入り、父親と心が通い合うわけでもなければ、村の娘たちと交際するのでもない。彼女がたまたま出会い、求婚されて飛び付いた相手は、間もなく故郷に帰って姿を見せないばかりか、時々送られる手紙も形式的で素っ気なく、それも道理で、彼はその町で他の女性と結婚していたことが最後にわかる。また、フィリスと軽騎兵ティナとの恋にしても、彼女は駆け落ちまで考えながら、すんでのところ、数年ぶりの婚約者の出現という運命のいたずらに会って、ティナから身を退くことになる。この2人の恋人たちの別れのあと、例えば語り手は次のような、まさに痛切きわまる注釈を付け加えるのを忘れない。フィリスは家に帰って、ティナとの出会いを初めから終りまでしみじみ思い返すのだが、「彼(＝ティナ)自身の国に戻り、故国の女性に取り囲まれたら、彼はおそらくすぐにフィリスを、それこそ彼女の名前まで忘れてしまうだろう⁽⁴⁾」と補足されるのである。いささか陳腐に聞こえるものの、孤独は人間存在の絶対条件であり、それはこの作品「ドイツ人部隊の憂うつな軽騎兵」の基調をなしているといえる。

前に触れたことだが、およそ短編小説というのは、珠玉の芸術性を目

指す点で、さわめて意識的な言語構築物である。その特徴の1つは、時には「省略の美学」と呼ばれるように、言葉のむだを省きながら、その暗示や象徴の効果を重要視する。この作品も、作家ハーディの短編のなかで、技巧的工夫の目立つものの1つだろう。例えばフィリスと軽騎兵ティナが出会い、密会を重ねる場所として、石塀がある。彼女は庭のはずれのその上に座って彼と会い、話を深めながら、彼の方は庭の中へ入ることをしない。語り手のことばを借りると、「その石塀は、必然的に、なにか親密さのようなものを困難にした。そして彼（＝ティナ）はあえて庭の中へ入ろうともしないし、入るのを要求することもなかったので、彼らの全会話はこの境界越しに公然と行われた⁽⁵⁾」と説明される。つまり石塀は、そこではまた、彼ら2人の結び付きを究極的に隔てるものとして使われ、いわばこの作品の主題を暗示する「^{キーワード}鍵ことば」になっている。物語の展開部に見られるその石塀の描写は、見事といわざるを得ない象徴性を帯びて、まさに作品全体をおおうのである。

ところで、この作品の物語自体は、発表時よりおよそ90年前の出来事を扱っている。語り手は当時の状況が、とくに背景のものごとが読者に違和感を与えないよう、随所に補足的説明を加えることを怠らない。当時の人里離れた田舎の比較しようもない寂しさや、騎兵隊の華やかさ、軽騎兵の派手な衣装と、人びとの抱く騎兵観や戦争観などは、そのような時間的ずれを補う、1例とってよいだろうか。そもそも、語り手は物語の初めから、作品の枠組として、時間の経過をいわば皆無にし、その物語への身近さを読者に訴えるのである。冒頭の次の文章、「ここに小高い丘の草原が、そよ風が吹き草も緑に萌えて、あの多事多難な時代から少しも変わらず、まっすぐ続いている。芝地はすきに荒されたこともなく、当時1番上にあった芝土は今もそのまま1番上にある。ここに^{キャンプ}陣営が置かれていたのだ、……⁽⁶⁾」というのは、そのことを明確に示しているだろう。クリスティン・ブレイディのことばを借りれば、「最初

の節のなかで、現在時制と『ここに』という単語が繰り返し使われ、それらの繰り返しは読者の心に、過去と現在の密接な関係を印象づける⁷⁾ということになる。つまり、90年の才月の経過は確かにあるのだが、フィリスの物語は読者の体験するかもしれない物語で、その意識によって、主題の訴求力も効果的に深まってくる。時間のいわば心理的停止は、ここでは、過去へのそのような身近さを強める、短編小説にふさわしい、自然でいてすぐれた、工夫の冴えを示すものではないか。

もっとも、そのことといささか矛盾するようだが、時間は確かに経過しているのである。物語のなかで、例えばフィリスの最初の婚約者グールドが故郷の町へ1人帰ったあとで、彼の動行に関連し、時間の着実な経過を、読者はフィリスの寂しさや不安とともに意識させられる。「冬がやって来て、約束の日が過ぎた。だがグールドは来るのを延期した、……。春が深まった。……その春はやがて夏となり、……。夏が来ても……。いぜんとしてハンフレイ・グールドは姿を見せなかった⁸⁾」というように。物語はそのフィリスの寂しさについて、彼女と軽騎兵ティナの恋へ発展し、その経過が、やはり日を追って週を追って語られることになる。そして、ものごとすべてが終わったあとの物語の締め括りで、時間の経過が再び書き込まれると、たとえ作品の枠組としてであれ、読者は改めてその確実さを意識しなければならない。

彼ら(=軽騎兵ティナとその友人のクリストフ)の墓は小さな教会の裏手で、例の塀の近くに堀られた。その場所の目印となる碑はないが、フィリスが私にそれを示して教えてくれた。彼女が生きている間は、彼女は2人の塚をこざれいにしていたものである。だが今では、それもイラクサが一面に生い茂り、ほとんど平らになってしまっている。しかしながら、村の年よりたちは、この物語を親から聞いて知っており、今でも、その兵士たちが横になっている場所を思い出すこと

ができる。フィリスも近くに眠っている⁽⁹⁾。

これはいかにも静かな幕切れである。それは余分な説明を省き、ものごとの結末を適確な表現で描写している。短編小説にふさわしい「統一と簡潔さ」がここでも守られ、それでいて余韻も力強く残る。この光景が時間に関連して冒頭部に戻ると思われることを、さらに注意してもよいだろうか。

そして、その最後の文章、「フィリスも近くに眠っている」(Phyllis lies near.) という言葉には、短いものの、やはり、語り手の万感の気持ち込み込められていると考えたい。運命のいたずらということが人間をいわゆる責任から解放してくれたとはいえ、そこには、孤独におおわれるこの世の人間の惨めな状況、幸せを妨げる人生の皮肉、ものごとに振り回されながらやがてはかなく終る人生などと、いわば哀れみの情があふれてくるからである。華やかな軽騎兵の衣服とは対照的に、作品全体に行き渡る寂しい、陰うつな雰囲気は、ほかでもない作家ハーディの、惨めな人間存在へ寄せる思いに基づくのだろう。短編小説1つを取り上げ、作家の視点を見つめるのは無茶もはなはだしいところだが、作品「ドイツ人部隊の憂うつな軽騎兵」は、主題といい舞台といい、いかにも作家ハーディらしい内容の窺える1編である。しかもそれは、物語がやや長期に渡る嫌いがあるにせよ、短編小説の特徴を充分そなえ、細部の表現にも神経の行き届いた、模範的な短編といえるのではないか。

NOTES

- (1) Kristin Brady: *The Short Stories of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1982), p. 1.
- (2) *Ibid.*, p. 1.

- (3) Thomas Hardy: *Collected Short Stories*, the one-volume New Wessex Edition (London: Macmillan, 1988) p. 47.
- (4) *Ibid.*, pp. 48–49.
- (5) *Ibid.*, p. 40.
- (6) *Ibid.*, p. 35.
- (7) Kristin Brady: *op. cit.*, p. 18.
- (8) Thomas Hardy: *Collected Short Stories*, pp. 37–38.
- (9) *Ibid.*, p. 51.